

江戸東京野菜について学び、兵庫の在来小豆をみてもらおう—各地の在来種の種を繋げ、在来種栽培を広めていく東西交流会、そしておまけの土佐さん、井上さん、阪本先生行き記録

愛媛の宮本幹江さんの記録

10月22日から一泊二日で、「伝統野菜の勉強会」があった。初日の講師は東京時代、いろいろお世話になった大竹道茂さん（江戸東京・伝統野菜研究会代表）で、私とパートナーの土井利彦にとっては6年ぶりの再会だ。私たちが都市農地を残すことを目的にNPOを立ち上げ、行政（小金井市経済課）、JA、商工会（飲食店）などと一緒に、江戸東京野菜で地域おこしを始めたのは

菜を作っている農家さんを訪ねて、種子を毎年とりつづけてもらうようお願いするなど、地道な努力を続けておられた。いま、各地の伝統野菜は「地域おこしの救世主」のようにちやほやされているが、こうした活動の裏側には、大竹さんのような目に見えない活動を続けてこられた人がいることを忘れてはならない。

さて、多くの方は「大都会の東京に伝統野菜？」と思われるだろう。しかし、参勤交代のおかげで全国から野菜の種が江戸に集まり、それが改良されて再び地方に移動したという歴史がある。東京には広い農地はないが、種と土があれば学校でも福祉施設でも商店街でも栽培できるため、住民が

おもしろがって地元と縁のある伝統野菜を活用して、地域を元気にしている事例が多数紹介された。ともあれ、命をつなぐ種と



2006年で、大竹さんにはたいへんお世話になった。

大竹さんは長年、JA東京中央会という大きな組織に属し、30年前から東京の伝統野菜に注目。土地に根づく伝統野菜を後世に伝えるため、近くの神社に顕彰碑を建てるなどの活動を行い、それと並行して伝統野

それを育てる農地を残さなければという結びで、大竹さんの話は終わった。

その夜は、丹波市春日町に移動して、婦木克則さん夫妻が運営する農家民宿（体験型宿泊施設）「O（まる）」に。黒大豆の枝豆のほか、おでん、里芋ご飯、だし巻き卵、サラダ、チーズ、プリンなど、婦木農場で

とれた食材で、奥さん手作りの料理をいただき、婦木農場についていろいろ話を聞いたが、2人の男の子が家で農業を手伝っているという話が心にしみた。ジャージー乳のチーズはその息子さんが担当していて、まだ始めたばかりだそうだが、持参した愛媛の地酒にもぴったりだった。

2日目は、春日町で「黒さや大納言小豆」を生産している柳田隆雄さんを訪ね、小豆の収穫をさせてもらった。今年はさやの色づきが浅めで茶さやに近いというが、1さや1さや手でもぎとってパケツに入れていく作業は、たぶん昔ながらのやり方であろう。さやがはじめて小豆が飛び出すのを避けるため、空気が乾燥していない午前中にやるのがよいと言われたが、大いに頷ける。

柳田さんの奥さんはお料理上手で、自宅で「あずき工房やなぎだ」を開き、大納言小豆のほか、手作りのおはぎ、ようかん、小豆味噌などを販売されている。お昼は小豆料理のお膳をいただいたが、これがまたすばらしいものだった。なかでも、小豆あんブルーベリーを混ぜたものが地鳥を焼いたものにかけてあり、甘味と酸味の絶妙さがとても楽しかった。小豆のようかんも絶品で、また注文したいと思っている。

*

これで、一泊二日の「伝統野菜の勉強会」は終了。このあとは、愛媛から訪ねた私たちのために、代表の村山日南子さんが特別にセッティングしてくださった特別プログラムである。

24日は京都府の福知山市へ。その山里に京都市内からリターンし、農事組合法人を作って活動している土佐祐司さんを訪ねた。土佐さんの実家がある集落は町からそう遠くないとはいえ、高齢者ばかりの4軒で、失礼ながら私が暮らしている大洲の大貨集落のほうが景色は断然美しい。しかし、土佐さんは「この山に囲まれているのがいい

んだ」と言いきり、国や府のさまざまな助成金を駆使して奮闘しておられる。仲間には若者もいて、彼が都会から親子連れを招き、古民家での昼寝や柿とりなどの田舎体験を提供している。この日は、こんにやく作りを見せてもらったが、土佐さんからは不思議な力をもたらした気がする。

さらに車で30分ほど走ると、綾部市の志賀郷地区。ここでは、お米の勉強会会員で、「かかりつけ米農家」の井上吉夫さんががんばっておられる。人口1500人で過疎の町だというが、移住した若者による讃岐うどん店もあり、女性たちの加工品開発も盛んで、とても活気があった。井上さんの大きな米倉庫も見せてもらい、夜は井上さんの自宅で鍋料理をいただき、泊まらせてもらった。

そして、最終日の25日。京都を抜けて琵琶湖の西側を北上し、雑穀研究で有名な阪本寧男（さだお）先生の自宅を訪ね、雑穀の話の聞かせてもらうという夢のような時間を過ごした。阪本先生はとてもきさくな方で、四国にも何度も足を運ばれていることだった。自宅に入るアプローチ斜面にはアケビの仲間の「ムベ」の蔓がまきつき、実をたくさん付けていた。また、室内にはヒガンバナの花のあとの実があり、これを播いて芽を出させるのが楽しみと語っておられた。私も四国愛媛で山暮らしをしているが、阪本先生のほうがよっぽど植物との距離がほんとうに近い。いろいろなことを考えさせられる旅となった。

残念だったのは、比叡山麓の「麦の家」を訪ねられなかったこと。私たちはちょっと時間があつたので立ち寄り、失礼ながらトイレをお借りした。昔ながらの汲み取り式であつたが、そこには野の花が生けられていた。いずれ機会があつたらぜひお訪ねしたい。

このような機会を提供いただいた村山日南子さん、ありがとうございました。